

遠い「ふるさと」を離れても

南丹市立園部中学校 1年 久保田 美優

「ふるさと。」眺めているだけで心が落ち着く見慣れた景色。かけがえのない思い出を想起させる空気感。そこで過ごす時間は居心地がよくて、自然と笑顔がこぼれます。自分が生まれ育ち、何ものにも代え難い大切な場所。そんな「ふるさと」があなたにありますか。

世界には約 7084 万人以上の人々が、自分たちが生まれ育った馴染みのある地を追われ、苦しんでいます。「難民」と呼ばれる彼らの半数以上が、私と同じ世代の子どもたちです。今もなお、先の見えないトンネルの中で、懸命に光を探しているのです。600 kmもの道のりを、身も心もすり減らしながらも、一筋の希望を胸に、歩き続けている人々がいるのです。難民の人たちが何を思い、何を感じているのかに目を向けようと思ったきっかけは、私が新しく春から通うようになった学校での授業でした。

私にとっての「ふるさと」は北海道釧路市です。この春に、京都府の学校へと転校してきました。入学早々、新型コロナウイルス感染症に伴う臨時休校となり、新たな環境下での戸惑いや不安もありました。学校に行くことがあたり前と考えていた私にとって、はじめての経験の連続でした。私にとってのあたり前が、いとも簡単に奪われてしまうことに恐怖すら感じました。

6 月には学校が再開し、授業を通して「SDGs」について学びました。国連が採択した「持続可能な開発目標」とも呼ばれる、世界がつながるための取組です。SDGs の目標 12「つくる責任つかう責任」に視点をあてた、ユニクロの「服のチカラプロジェクト」が 1 学期にありました。私は、小学生の頃から北海道に住む仲間とともにこの取組に参加してきました。そして、今度は新たな仲間と、難民の人々の生活を、世界を少しでも変えるためには「中学生である私たちには何ができるのか」について、お互いの意見を出し合いました。世界で起きている人権にも関わる問題を解決することは、とても難しいことです。しかし、みんな真剣に問題について向き合っていました。「難民の子どもたちの写真は、どれも汚れていたり、サイズが合っていなかったから、家にある子ども服を寄付してあげよう。」「気持ちよく着てもらえるように、洗濯してから寄付しよう。」といった相手を思いやる意見が多く出ていました。新たな仲間とそして、世界とつながることができることに、気づくことができました。

「他人事ではなく、自分事。」これは、私がこれから生きていく上で大切にしたい考え方です。1 人でも多くの人が、あたたかい心を持ち、自分事として行動することができれば、きっと世界は変わります。私たちの行動は、たとえ一粒の水滴であったとしても、水面から広がる波紋のように、大きな輪を描き、世界を変えることができるかもしれません。住む地域、国籍が違ったとしても、思いはきっと届きます。遠い「ふるさと」を離れても。